

土木屋として西日本豪雨災害への考察



(特非) シビル NPO 連携プラットフォーム 理事

NPO 法人州都広島を実現する会 事務局長 **野村 吉春**

広島はNPOとして、この度の西日本豪雨災害では、ご心配をおかけします。幸いにも我がNPOへの被害は有りませんでした。ともあれ土木屋として、この地域をよく知るものとして無関心ではおれません。そこで、皆さまに簡単な報告（考察）を致させていただきます。

●豪雨災害は新たなフェーズに

広島では2014年に「我国最大の都市型土砂災害」を受け、この度は4年後にあの時を上回る「西日本豪雨災害」を発生。つまり、緊急警報に言う「数十年に一度の危機」ではなく、これからは「数年に一度」という覚悟を実感しています。



JR芸備線の橋梁流失

●2014年災害と今回の違い

2014年の時は、広島市北部の約10kmの狭い範囲に被害が集中（私の住む安佐南区75名+安佐北区2名の死者）。今回は大雨特別警報が11府県に発表され、被害の中心は広島市から岡山県倉敷市の凡そ150kmという広範囲に及び、全体の死者数が凡そ200人を超える災害を発生しました。



水路が詰まって道路が河川に

●二つの災害のタイプ

2014年の災害は、すべて「土砂災害」であったが、今回は「土砂災害」に加えて、甚大な「洪水被害」が発生し、これにダム放流問題も加わり、問題が複雑化しています。

●人家+交通インフラの損壊

2014年の物的被害は、「人家の損壊」でしたが、今回は新たに道路や鉄道など「交通インフラの損壊」が多発し、地域に与える影響が非常に大きく、例えば、JR山陽線の復旧に4か月、呉線は半年、橋梁を流失した芸備線は1年以上とのこと。既に、地域の生活や経済活動に、大混乱を引き起こしています。

●水路断面の問題

土砂災害の多くが、現状の小河川や水路断面が非常に小さく、橋や暗渠に流木が詰まり被害が拡大。砂防堰堤の増設に加えて、特に橋や暗渠断面の拡幅工事が必要です。

●河川合流部の問題

倉敷市真備町、三原市本郷町の浸水被害などは、何れも河川のバックウォーター現象によるもの。これらは、土木のプロが地形図を見れば、誰でもわかる話で、「この改善工事を政治が何時やるのか？」という問題に帰着します。



●高齢者の避難誘導の問題

この度の災害の犠牲者は、過半数が高齢者の逃げ遅れです。今後の高齢社会には「高齢弱者を如何にして避難誘導するか」が問われています。

●被災地への支援格差の問題

今回は被災の範囲が広く、被災状況が最近になって分かったという辺地も多く、人口減少に悩む中山間地域は報道もされず、道路の崩壊で交通路が断たれ、ボランティアも来てくれない。この度はそんな「被災地の支援格差」が問題化。7/31の地元紙には被災地に「過疎進む懸念」との記事が掲載されました。

●若者たちに期待する

暑い最中ながら、広島県の新しい教育長の指導のもと、地元の高校生や大学生などの若手ボランティアが、「泥かき作業」への多数参加はとても素晴らしいこと。これは、学校の授業よりも価値のある教育だと思いました。

●プロボランティアに感動

7 地元TV局の報道番組で、マウンテンバイクで泥だらけの被災現場を走り回る「プロボランティア」を紹介していた。彼は「泥かき作業」などの力仕事は一切しないけど、①直ちに現地の被災状況を把握し仲間とスマホで連携、②ボランティアの割振りや現地指導、③地元の土建業者へのコンサルティング、④役所への要請などの各種交渉・・・彼の（バイク+ICT+交渉力を駆使した）凄いパワーに感動しました。彼こそは優れたコンサルタントであり、ゼネコンの能力そのもの。まさにシビルNPOの手本だと思いました。

（下図の4コマは、7/20放送のRCC・TVの「RCCニュース6」からの紹介です）



高校生・大学生のボランティアが続々



泥だらけの被災地をバイクで走り回る



現地での指示の様子



地元の土建会社に重機の手配を交渉



業者を連れて呉市役所での交渉

以上